

# 保育者の保育内容「表現」の関わりとその方法

— 表現活動を引き出す手だてについて —

A Clue and the Method to Practice “Expression” in Contents of Childcare and Education in Nursery School and Kindergarten Teacher.  
— The Study on The Method of Developing Body Expression Activity. —

高原 和子・瀧 信子\*・宮嶋 郁恵\*\*

Kazuko Takahara・Nobuko Taki・Ikue Miyazima

\*第一保育短期大学 \*\*福岡女子短期大学

本研究は幼稚園および保育所に勤務する保育者を対象に、子どもの豊かな表現活動を引き出すために、日頃どのような手だてを保育者自身が心がけているのかを明らかにすることを目的として調査検討したものである。データは2006年2月～3月に質問紙によるアンケート調査を実施し、自由記述形式で尋ねた「表現活動展開のための日頃の手だて」に回答のあった436名を対象とした。自由記述による「表現活動展開のための日頃の手だて」は、内容を解釈した上で「子どもたちの経験」「環境構成・準備」「具体的な働きかけ」に関するものに分類した。さらに、「具体的な働きかけ」については、「雰囲気作り」「イメージ作り」「観察・見守り」「共感・承認・意欲」「子どもの主体的な活動」「子ども同士の関わり」「言葉かけ」「動きの提示」の8項目に分類し、保育者の経験年数および担当年齢による違いについて分析した。その結果、保育現場では、雰囲気作りやイメージ作りを心がけ、また共感し、承認することで子どもの意欲を盛り上げようとしていることが分かった。経験年数からみた保育者の働きかけからは、経験年数が浅いほど子どもに共感したり、承認することで意欲を盛り上げようと配慮し、子どもの主体的な活動を重視する傾向が認められた。担当年齢別にみた保育者の働きかけからは、発達段階に応じた働きかけが行われていることが確認できた。特に4・5歳児においては、様々な対応を試みようとしていることが推察された。以上のことから、保育者が教育要領等にも示されている『自分なりに表現して楽しむ』『様々な表現を楽しむ』ことを重要視していることが伺えた。そしてそのための雰囲気作りを基本として捉え、工夫していることが示唆された。

キーワード：保育者、保育内容表現、表現活動、身体表現

## はじめに

現行の幼稚園教育要領では、「生きる力を育てる」ことを目標に、幼児が遊びを中心とした生活をとおして、また豊かな生活体験をとおして自我の形成を図り、生きる力の基礎を培うことを基本方針としている。また、保育所保育指針では、子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う

ことを目標としており、3歳以上児においては幼稚園教育要領と同じように「生きる力」の基礎を育てる内容となっている。そして、この目標を達成するために、保育者が援助して子どもに身につけていくことが望まれる事項を発達の側面から示したものととして「5領域」が設けられている。

5領域の一つである保育内容「表現」は、「感性と表現に関する領域」とされ、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や

表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことをねらいとしている。

子どもは、驚きや感動など自分が体験したことや発見したこと、感じたことがあると動きをもって身体で表現することがある。他者に自分が感じたことを伝えることで、その喜びは増し、そして相手が共感することでさらにその喜びは増大する。この喜びと相手の共感が得られたという実感は、子どもに自信と満足感をもたらし、それがまた次への意欲とつながっていく。この繰り返しにより子どもの感性や表現力が養われていく。これが子どものより良い心情、意欲、態度を育て、「生きる力」につながっていくものと考えられる。

この保育内容「表現」のねらいを踏まえて、これまで筆者らは、子どもの感性と表現を伸ばすために、身体表現活動をとおして子どもの豊かな表現活動を展開するための環境の工夫や活動内容の実践的な検討を行ってきた。そして子どものイメージや動きを引き出すための有効的な手段について検証してきた。さらに、保育者養成校においては積極的にイメージと動きをベースにした表現遊びを取り上げて実践し、豊かな身体表現活動を指導できる保育者を養成することを目標にしてきた。

しかし、実際はイメージや動きをベースにした表現遊びを実際に保育現場において実践する者は少ない傾向にある。また、保育現場では、表現活動を苦手とする保育者も見受けられる。この要因についてはいくつか考えられるが、その1つには保育現場における身体表現のとらえ方の違いがあり、本来の身体表現活動の定着に至っていないことがあげられる。

1989年に改訂された幼稚園教育要領においてはじめて保育内容「表現」が設けられ、その際、身体表現活動については、従来の音楽に付随するものとしての取り扱いを払拭し、身体表現本来の特性を生かした教育が求められることとなった(園山ら1997)。しかし、1998年に実施した保育現場における表現活動の調査では、表現活動は音楽表現が主流で、身体を使った表現活動としては手遊びや既成のダンスなどが行われているという結果が出ている。また、イメージや動きをベースにした表現遊びを実践する例は少なく、そこには旧教育要領の「音楽リズム」の流れが改訂後9年を経ても存在していた(下釜ら1998)。

では、現在の状況についてはどうかというと、1998年の調査結果と同様の結果が報告されている(青木ら2006)。さらに、身体表現に対する保育者自身の経験不足や子どもの生活体験不足が指摘されている。

このような状況の中で、身体表現本来の特性を生かせるイメージや動きをベースにした表現遊びを現場に定着させていくためには、保育者養成校の役割は大きく、どのように養成していくかが課題となる。そのためには、イメージや動きを引き出す身体表現の指導法の確立が必要となるが、それにはまず現場における保育者の指導の実態を知っておく必要がある。そしてそのことを検討し、保育者養成に生かすことが重要であると考えられる。

以上のことから、保育現場において、保育者がどのような視点を持ち、どのような手段をもって表現活動の実践にあたっているのかを実際に調査し、現場の実態を確認する必要があると考える。そこで、本研究では保育現場における表現活動について調査し、保育者が、子どもの豊かな表現活動を展開するために日頃どのような手だてを心がけているのか明らかにすることを目的とし、現場保育者の表現活動の実態を検討することを試みた。そして、この調査結果から得られた情報を、イメージや動きをベースにした身体表現活動の指導法確立の基礎資料とすることとした。

## 方 法

### (1) 調査対象と調査方法

九州島内7県(福岡、熊本、大分、宮崎、鹿児島、佐賀、長崎)にある幼稚園・保育所に勤務する保育者を対象として、質問紙法によるアンケート調査を実施した。有効回答は436名分であった。

### (2) 調査期間

2006年2月から3月にかけて実施した。

### (3) 調査内容

主な質問内容は以下のとおりである。

#### 1) 対象者の属性

年齢、性別、経験年数、担当年齢。

#### 2) 表現活動展開のための日頃の手だてについて

(自由記述)

結果および考察

(1) 対象者の属性

対象者の属性については、表1に示す。

(2) 表現活動展開のための日頃の手だて

自由記述による「表現活動展開のための日頃の手だて」の回答例を表2に示す。回答例からも分かるように、1つの回答には複数の要素が含まれていることから、それぞれの回答の内容を解釈し、要素ごとに、「子どもたちの経験」に関するものと「環境構成・準備」に関するもの、「具体的な働きかけ」に関するものとに分類した。(図1) この分類にあたっては、保育者養成校において保育内容「表現」を実際に担当している筆者らを含めた6名で内容を協議・検討の上、分類を行った。その結果、ほとんどの回答に「具体的な働

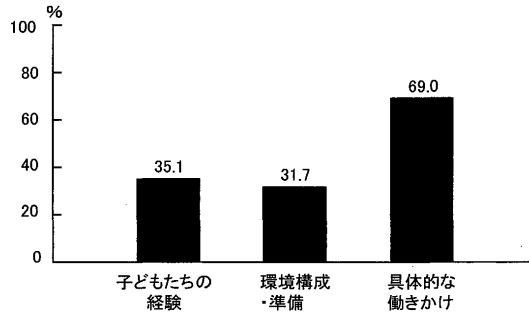


図1. 子どもの豊かな表現活動を展開するための保育者の日頃の手だて

きかけ」に関する記入があり、保育者が保育現場において表現活動を展開するにあたって、子どもたちに対して何らかの働きかけを行っていることが分かった。そこで、どのような働きかけが行われているかを詳しく分析するために、さらに次の8つの項目に分類した。分類は、

- ① 雰囲気作り
- ② イメージ作り
- ③ 観察・見守り
- ④ 共感・承認・意欲
- ⑤ 子どもの主体的な活動
- ⑥ 子ども同士の関わり
- ⑦ 言葉かけ
- ⑧ 動きの提示

表1. 調査と対象者の概要

調査時期	2006年2月～3月		
調査方法	質問紙法によるアンケート調査		
調査地域	福岡・熊本・大分・宮崎・鹿児島・佐賀・長崎		
有効回答数	436		
性別	女性 430名	男性	6名
年齢	平均 31±8.7歳 (20歳～57歳)		
所属施設	幼稚園 206名	保育所	230名

表2. 「保育者の日頃の手だて」質問と回答例

Q. 子どもの豊かな表現活動を展開するために、あなたは日頃どのような手だてを心がけていますか。(自由記述)

- A. ●印象的なことがあった時などすぐに擬音語・擬態語などで表現したり、動きにつなげたりして、その出来事をより強く印象づけ、一緒に楽しむようにする。
- 保育者が主とならず、子どもたちのイメージがふくらむよう心がける。経験不足の子どもには自ら喜んで参加できるよう援助する。
  - 子どもが自由に表現している姿を認め、ほかの友だちに意見を聞く。
  - 子どもの言葉をしっかり聞き、その子自身を受け止め、認めて、安心して自分の表現ができるように見守る。
  - 保育者が率先して表情や動きによる表現をして見せ、表現することは楽しいと感ずることができるよう心がけている。
  - 保育者自身が思い切り表現し、表現すること(動くこと)と一緒に楽しみ、共感する。
  - できるだけ子どものイメージを大切に、動きが引き出せるようにする。
  - イメージがふくらむように言葉かけをしたり、「こんなのもあるよ」と実際に例を見せる。
  - 子どもの思いの表現を受け止め、安心して表せるような雰囲気をつくる。
  - 子どもの興味関心を捉えながら、動きやすいような言葉かけの工夫をする。
  - 子どもたちが自由に伸び伸びと表現できるような雰囲気をつくる。
  - 絵本や紙芝居の読み聞かせや、歌や遊戯を通して表現する機会を多く持つ。
  - 子どもたちが動きだしたくなる、表現したくなる環境を工夫して準備する。

表3. 「保育者の日頃の手だて」具体的な働きかけのキーワード

① 雰囲気作り	楽しく、おもしろく取り組む 雰囲気を盛り上げる
② イメージ作り	いろいろな素材を通して想像をふくらませる イメージをふくらませる
③ 観察・見守り	子どもを観察する、見守る 一人一人の子どもを見る
④ 共感・承認・意欲	子どもとともに、一緒に楽しんだり、感じたりする 子どものつぶやきや言葉に耳を傾ける
⑤ 子どもの主体的な活動	自由にのびのびと自己表現する 一人一人の想いや活動を大切に
⑥ 子ども同士の関わり	友だちと一緒に、友だちの動きを見る グループで活動
⑦ 言葉かけ	声かけ、言葉かけ 擬音語、擬態語を使う
⑧ 動きの提示	保育者が動いて見せる 保育者が大きな動作で動く

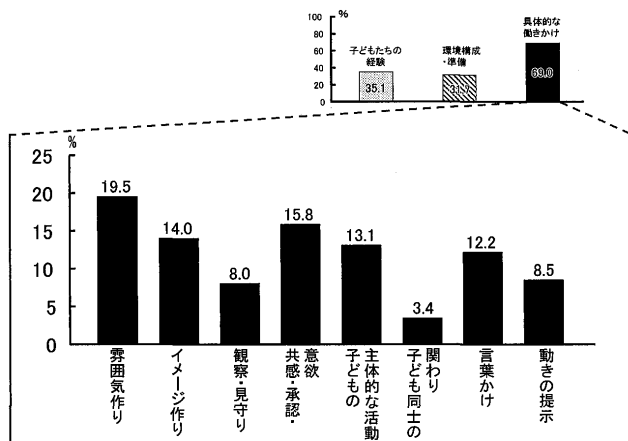


図2. 保育者の日頃の手だて「具体的な働きかけ」(複数回答)

である。(表3)

表現活動展開の手だてとしての具体的な働きかけの分類の結果では、複数回答の中で「①雰囲気作り」(19.5%)、「④共感・承認・意欲」(15.8%)、「②イメージ作り」(14.0%)が上位を占めていた。(図2)この結果からは、教育要領等にも示されている『自分なりに表現して楽しむ』『様々な表現を楽しむ』ことを保育者が重要視していることが伺えた。そしてそのための雰囲気作りを基本として捉え、工夫していることが示唆された。また、子どもたちの活動に対して、保育者が共感したり承認することで子どもたちの意欲を引き出そうとする働きかけが認められ、幼児が主体的に活動できるように配慮していることが伺えた。

このような働きかけは、保育者の経験年数や担当する子どもの年齢により変化するものと考えられる。そ

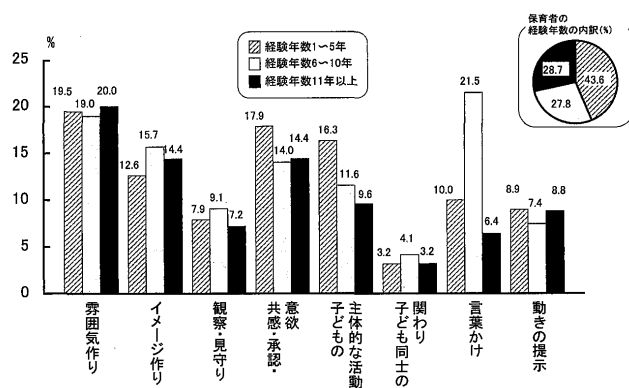


図3. 経験年数別 保育者の具体的な働きかけ (複数回答)

こで、具体的な働きかけについて保育者の経験年数(1~5年、6~10年、11年以上)と担当する子どもの年齢(0・1歳児、2・3歳児、3・4歳児)に分けて分類してみた。経験年数と担当年齢の内訳を表4に示す。

経験年数は、1~5年が190名と最も多く、11年以上が125名、6~10年が121名でほぼ同数であった。これら経験年数からみた保育者の具体的な働きかけの結果は、経験年数1~5年および11年以上の保育者では、「①雰囲気作り」を一番多く行っており(それぞれ19.5%、20.0%)、全体の結果と同じ結果であった。一方、経験年数6~10年の保育者では「⑦言葉かけ」の手だてが最も高く(21.5%)突出していた。この経験年数6~10年の保育者は他の経験年数に比べて最も多く具体的な働きかけを行っており、子どもの表現を引き出すための工夫として保育者の働きかけ、中でも

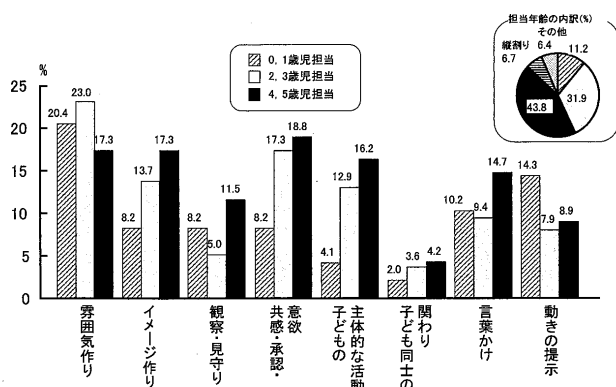


図4. 担当年齢別 保育者の具体的な働きかけ (複数回答)

言葉による働きかけを最も重要と考えていることが伺えた。一方、経験年数1～5年では「④共感・承認・意欲」と「⑤子どもの主体的な活動」を多く取り上げていた。また、経験年数11年以上の保育者は、他の経験年数に比べて具体的な働きかけが少なかった。このことから、経験年数により具体的な働きかけに違いがあることが認められ、経験年数が浅いほど子どもに共感したり、承認することで意欲を盛り上げようと配慮し、子どもの主体的な活動を重要視する傾向が認められた。(図3)

担当年齢は、4・5歳児の担当者が最も多く191名、次いで2・3歳児139名であった。これは、母数に幼稚園に勤務する保育者が206名(全体の47%)含んでいることから、4・5歳児担当者が多い結果となった。担当年齢別からみた保育者の具体的な働きかけの結果は、0・1歳児担当では「①雰囲気作り」が最も多く(20.4%)、次に「⑧動きの提示」(14.3%)であった。2・3歳児担当では、「①雰囲気作り」(23.0%)、「④共感・承認・意欲」(17.3%)の順であった。4・5歳児では「④共感・承認・意欲」が最も多く(18.8%)、「①雰囲気作り」(17.3%)、「②イメージ作り」(17.3%)と続き、ほとんどの項目において他年齢児に比べ出現率が高かった。(図4) これら担当年齢別にみた具体的な働きかけの結果から、保育者が発達段階に応じた働きかけが行われていることが確認できた。特に、4・5歳児においては、様々な対応を試みようとしていることが推察された。

## おわりに

改訂された幼稚園教育要領および保育所保育指針のもと保育内容が保育現場で定着している昨今、保育内容「表現」のねらいである「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことを達成するために、保育現場では様々な工夫と手段を実践していることが伺えた。しかし、身体表現としては、未だ手遊びや既成のダンスにたよっている部分が多くみられ、子どもの「表現」力を十分に伸ばしきれていない感じを受けた。

筆者らは、子どもの豊かな感性と表現を伸ばすためには、イメージと動きをベースにした表現遊びを十分に実践することが重要であると考えている。また、保育者自身が豊かなイメージを描き、子どもとイメージを共有できるような感性が必要であるとも考えている。

以上のことから、さらに豊かな表現活動を展開するための方法の工夫や活動内容の実践的な検討を行いながら、幼児のイメージや動きを引き出すための有効的な手段について検証を重ね、保育内容「表現」のねらいを達成し、十分な活動を保証するための指導法について検討していきたい。

## 文献

- 園山順子, 山口茂喜: 幼稚園教育要領における身体表現の取り扱ひの変遷に関する一考察. 日本保育学会第50回大会研究論文集, 908-909, 1997.
- 下釜綾子, 青山優子, 井上勝子, 瀧信子: 保育園・幼稚園における動きによる表現の現状と課題. 九州体育・スポーツ学会第47回大会号. 73, 1998.
- 文部科学省: 幼稚園教育要領. チャイルド社, 1998.
- 厚生労働省児童家庭局: 保育所保育指針. チャイルド社, 1999.
- 西洋子, 本山益子, 鈴木裕子, 吉川京子: 子ども・からだ・表現. 市村出版, 東京, 2003.
- 瀧信子, 青山優子, 下釜綾子: 幼児の身体表現活動を引き出すための有効なプログラム(指導案)の検討について. 日本保育学会第57回大会発表論文集, 690-691, 2004.
- 小松恵理子, 瀧信子, 青山優子, 井上勝子, 重松三和子, 下釜綾子, 小川鮎子: 効果的な身体表現指導法に関する研究—保育者養成校の授業分析から—. 九州体育・スポーツ学会第53回大会号. 68, 2004.
- 青木理子, 青山優子, 井上勝子, 小川鮎子, 小松恵理子, 下

釜綾子, 瀧信子, 松田順子, 宮嶋郁恵: 豊かな感性を育む表現遊び—心と体を拓く—. ぎょうせい, 2005.

下釜綾子, 青山優子, 宮嶋郁恵, 青木理子, 井上勝子, 小川鮎子, 小松恵理子, 重松三和子, 瀧信子: 幼児の豊かな身体表現を引き出す手だて. 九州体育・スポーツ学会第54回大会号. 47, 2005.

瀧信子, 青山優子, 小松恵理子: 幼児の身体表現を支える指導技術・技能について. 日本保育学会第58回大会発表論文集, 816-817, 2005.

瀧信子, 青山優子, 下釜綾子: 幼児の豊かな身体表現を引き出す手だて. 第一保育短期大学研究紀要, 17. 31-43, 2006.

青木理子, 青山優子, 井上勝子, 黒岩英子, 小松恵理子, 重松三和子, 下釜綾子: 保育現場における動きによる表現の現状と課題—平成10年度調査との比較—. 九州体育・スポーツ学会第55回大会号. 49, 2006.

高原和子, 小川鮎子, 下釜綾子, 瀧信子, 宮嶋郁恵, 矢野咲子: 表現活動を引き出す手だて. 九州体育・スポーツ学会第55回大会号. 50, 2006.